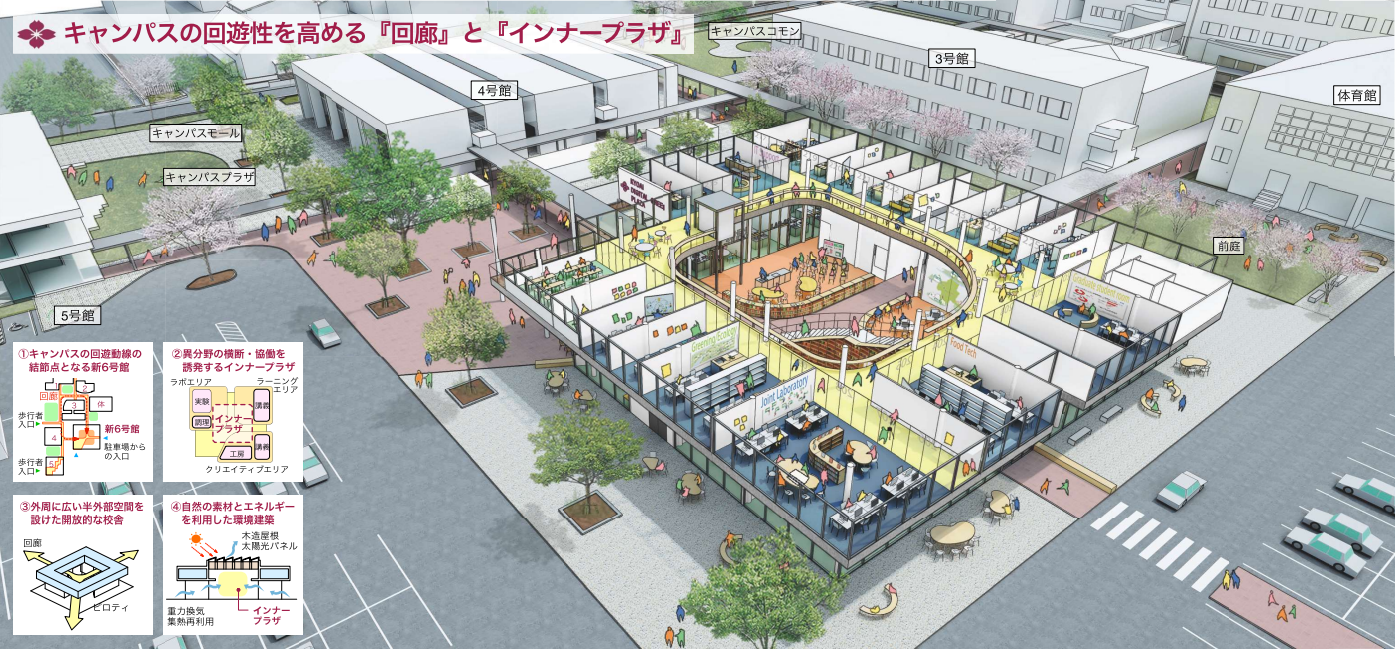
キャンパスの回遊性を高める『回廊』と『インナープラザ』



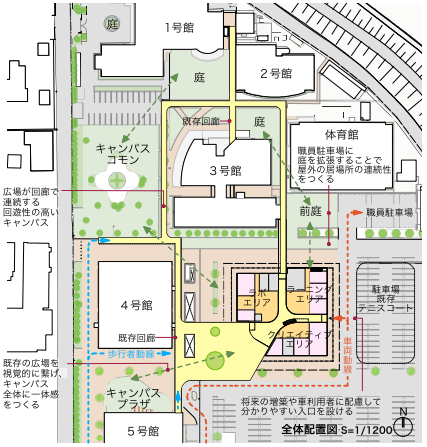
❶5号館キャンパスプラザから眺める。広いピロティでは様々な活動が行われ、キャンパスの連続感・一体感を感じさせる

❷ピロティの様子。作業や研究活動の発表の場となる

❸大講義室の様子。隣接するGWAと一体的な利用も可能

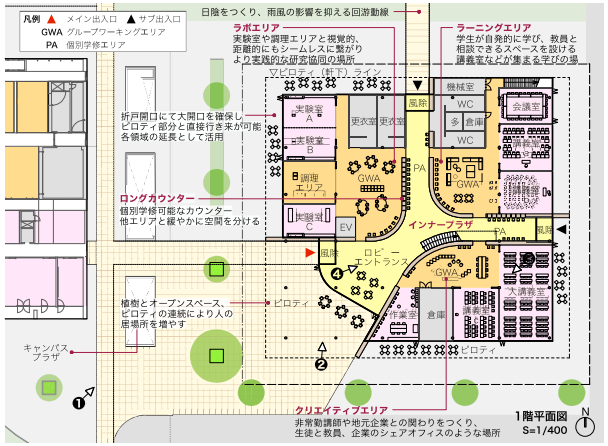
01 ループする回廊がキャンパス全体を再編する

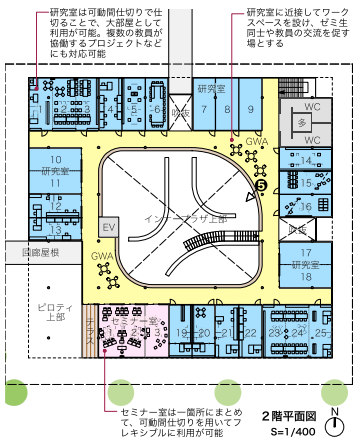
- 全ての校舎と屋外広場がループする屋根付きの回廊でつながることで、キャンパス内の回遊性を高めることを提案します。回廊が生活動線を雨風や夏期の日射の影響を抑えることで、屋外の居心地を向上させ、学部を超えた交流を促します。
- 6号館をループする回廊の結節点と位置づけ、キャンパス全体に基本となる骨格をつくるとともに、将来の増築、改築時の拡張性を担保します。



02 学際的な活動を誘発する『インナープラザ』を中心とした、開放的な平面計画

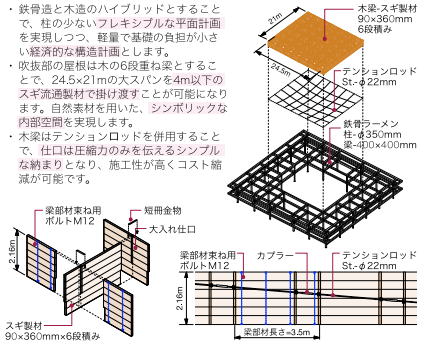
- 『インナープラザ』は6号館の中心となる広場空間です。グループワークエリア（GWA）や個別学修エリア（PA）が集合し、互いの活動を目にすることができます。実験室や講義室等が面し、様々なコラボレーションや分野を横断する活動が誘発される場所になります。
- インナープラザは外周の諸室に応じて、それぞれラボエリア、ラーニングエリア、クリエイティブエリアにゾーニングされています。諸室の活動があふれ出るオープンスペースです。
- 研究室は間仕切り壁を可動壁とすることで、個室としてだけでなく、複数教員が協働する大きなプロジェクトルームとしての利用が可能です。今後新学部が様々な分野の展開をしたときに、教員の増減や用途の変更にも柔軟に対応します。
- 6号館は外周にピロティを巡らせて半屋外の居場所を設けることで、多方向からアクセスしやすい建物とします。工房やキッチンなど、活動を屋外へと展開することが可能です。





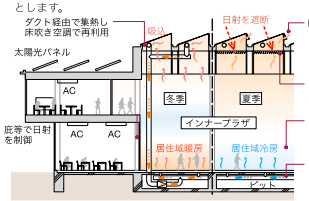
03 木造・S造を適材適所に用いた構造計画

- 鉄骨造と木造のハイブリッドとすることで、柱の少ないフレキシブルな平面計画を実現しつつ、軽量で基礎の負担が小さい経済的な構造計画とします。
- 吹放部の屋根は木の6段重ね梁とすることで、24.5×21mの大スパンを4m以下のスギ流通製材で掛け渡すことが可能になります。自然素材を用いた、シンボリックな内部空間を実現します。
- 木梁はテンションロッドを併用することで、仕口は圧縮力のみを伝えるシンプルな納まりとなり、施工性が高くコスト縮減が可能です。



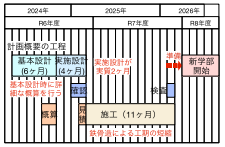
04 パッシブで維持管理のしやすい設備計画

- 環境を学ぶ学部として、6号館が環境技術の教材となることを目差します。
- 十分な厚みの断熱材や高断熱サッシの採用など、徹底して外皮性能を高め、極めて外部環境からの負荷の小さい建築とします。
- 天井の高い大空間である『インナープラザ』を快適な環境とするため、床吹き出しによる居住域空調を採用します。
- 加えて、重力換気や庇、水平ブラインドによる日射制御、冬期の集熱再利用など、自然エネルギーを最大限利用した計画とします。トップライトから自然採光を取り入れ、照明負荷を削減した明るい室内をつくります。
- 給気はすべて全熱交換器を採用し、省エネルギーや夏の湿度対策を行います。
- 今後の機能更新や拡張を想定し、設備機器や太陽光パネル等が設置可能な計画とします。



05 工事費の高騰・短期間の工期への対応

- 現在工事費は極めて高騰しているため、基本設計時に詳細な概算見積を行うことで、実施設計の手戻りや入札期間の短縮を図ります。
- ただし現在予定されている設計及び施工の工程は非常に短く、2026年度からの新学部設置に間に合わせるためには、既存施設の仮設的な利用も含めた柔軟な検討が必要と考えます。

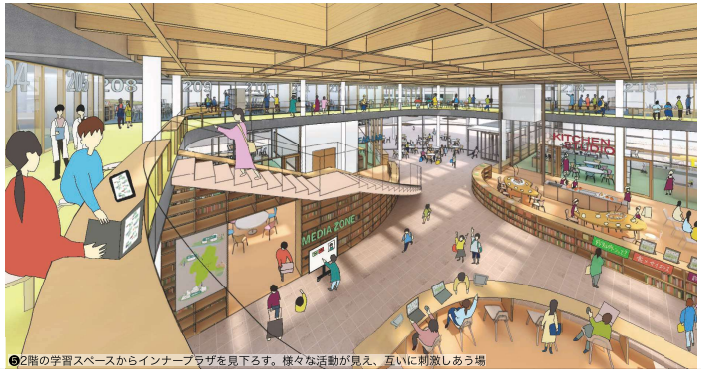


06 対話型の設計を旨とする設計チーム体制

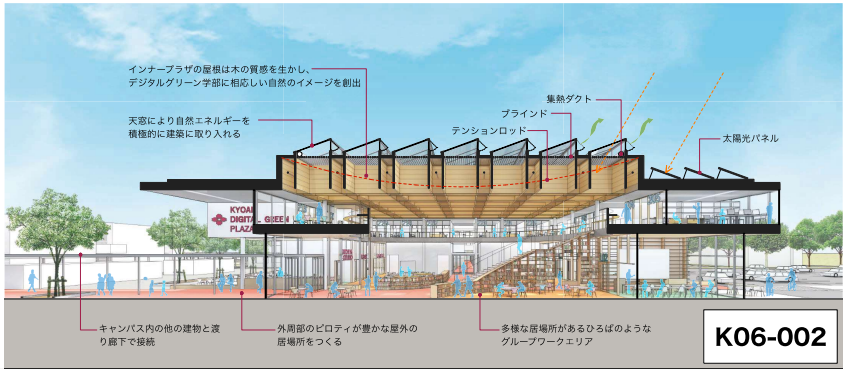
- 応募者はユーザー参加のワークショップを通じて教育施設の設計を進めてきた実績があり、本業務でもその経験を活かしてハード(施設)とソフト(教育)を連動しながら設計を進めていきます。
- また協力事務所は経験が豊富であり、現在の既存施設の設計条件についても熟知しています。
- 必要に応じて外部デザイナーとコラボレーションを行います。

意匠	木造経験豊富で対話型の設計プロセスに長けた建築家集団
構造	各地で公共施設の実績をもつ構造設計事務所
設備	キャンパスの既存校舎の設計を熟知している設備設計
積算	綿密な積算を行い、確実なコスト管理を担当
サイン計画	家具デザイン
照明計画	音響

❹インナープラザは通り抜けるだけで、様々な学習・活動を目にすることができる一体空間



❺2階の学習スペースからインナープラザを見下ろす。様々な活動が見え、互いに刺激しあう場



K06-002